

21 片側鼠径ヘルニアにおける腹腔鏡下対側検索の有用性について

木下 義晶・山崎 哲・金田 聡
飯沼 泰史・八木 実・窪田 正幸
新潟大学大学院小児外科

小児片側鼠径ヘルニア術後の対側発生率は10%程度とされ、患児のQOLを大きく低下させている。我々は2002年3月より腹腔鏡による対側腹膜鞘状突起開存の検索を導入し、現在男児15例、女児14例に施行した。陽性率は男児で3例(20.0%)、女児で5例(35.7%)、合計27例中8例(27.5%)であった。深鼠径輪の性状は症例により異なり、半月状ヒダにより視野が妨げられる場合、ゾンデを用いて展開を行い、診断能の向上に努めた。対側手術所見では8例全例に腹膜鞘状突起の開存を認めた。

22 慢性肺動脈血栓塞栓症に対して血栓除去術が奏効した一例

番場 竹生・曾川 正和・島田 晃治
中山 卓・名村 理・林 純一
新潟大学大学院呼吸循環外科

症例は60歳女性。主訴は呼吸困難。閉塞性肥大型心筋症にて内科加療中であった。一ヶ月前前から呼吸困難出現し、当院内科入院。肺血流シンチで両肺に多発性の肺梗塞を認め、胸部CTにて肺動脈主幹部から広範に血栓を認めたため、緊急手術施行した。手術は体外循環、心拍動下に肺動脈内の器質化した血栓を可及的に除去、末梢は内視鏡を用いて可能な限り血栓除去を行った。術後経過は良好で、肺動脈造影および胸部CTでは肺動脈の末梢も良好に造影された。右心カテでは肺動脈圧は術中54/23mmHgであったが、術後28/8mmHgと著明な改善を認めた。慢性の肺動脈血栓塞栓症に対して積極的に手術を施行し良好な結果を得たので報告する。

23 降下性壊死性縦隔炎治療中にサイトメガロウイルス感染症を併発した1症例

平原 浩幸・富樫 賢一・菅原 正明
小熊 文昭・佐藤 良智・宮村 治男
長岡赤十字病院心臓血管外科・呼吸器外科

症例は57歳女性で、急性喉頭蓋炎のため他院にて抗生剤の投与を受けていたが、呼吸不全となり、CT検査で頸部から上縦隔、右胸腔内に膿瘍を形成したため、当院に緊急搬送された。緊急手術を施行し頸部切開と右開胸で膿瘍ドレナージを施行し、人工呼吸管理となった。膿培養より*Streptococcus constellatus*, *Prevotella*を検出した為、IPM/CS, CLDMの点滴を行い一時炎症所見や呼吸不全改善したが第30病日より再び呼吸不全進行した。末梢血の染色でCMV抗原(pp65)陽性細胞が出現した為、デノシンの点滴を行ったところ炎症所見、呼吸不全改善し、人工呼吸器より離脱できた。重症感染症に併発したCMV感染症の1例を報告する。

24 上腸間膜動脈瘤に対しバイパス術を施行した一例

礪田 学・大関 一・中山 健司
田中 典生*・清野 康夫**
県立新発田病院心臓血管外科
同 外科*
同 放射線科**

症例は40歳男性。生来健康であったが、急激に発症した腹痛を主訴に当院を受診した。腹部血管雑音を聴取し、腹部CTおよび血管造影にて上腸間膜動脈根部に直径15mm大の不正形の動脈瘤を認めた。血液検査等で感染性の所見は認めなかったが、上腸間膜仮性動脈瘤の診断で手術の方針とした。腹部正中切開で開腹し、上腸間膜動脈を根部で結紮し、動脈瘤を切除した後、大伏在静脈グラフトによる脾動脈と上腸間膜動脈とのバイパス術を施行した。切除標本で動脈瘤は解離性と診断された。術後の経過は良好であった。術後血管造影にてグラフト開存性は良好であった。上腸間膜動脈瘤の治療は結紮術のみで有効とする報告が

あるが、バイパス術の併用は術後の腸管虚血のリスクを減らす意味で有効と考えられた。

25 非外傷性腹部大動脈破裂の一救命例

登坂 有子・金沢 宏・明石 興彦
志村信一郎・高橋 善樹・中沢 聡
山崎 芳彦*

新潟市民病院心臓血管外科
同 救命救急センター*

14歳、男児。急激な腹痛を訴えた後ショック状態となり、救急搬送された。来院時、血圧は触知不能。CTで後腹膜に多量の血腫を認める腹部大動脈破裂の所見であり、緊急手術を施行した。左開胸で胸部下行大動脈を遮断後、開腹。腹部大動脈には解離や瘤化の所見なく、terminal aorta 分岐部で穿孔していた。同部位に10mm Dacron グラフトを用いて人工血管置換術を行った。術後虚血性腸炎による腹痛と粘血便を認めたが、第32病日に軽快退院した。クモ状指を認め、身体所見より Marfan 症候群に関連した大血管疾患の可能性が考えられた。

26 直腸悪性黒色腫の1症例

三島 健人・岡田 貴幸・石川 卓
小杉 伸一・諸田 哲也・青野 高志
武藤 一朗・長谷川正樹・小山 高宣
酒井 剛*・関谷 政雄*

県立中央病院外科
同 病理*

直腸悪性黒色腫の1手術例を経験したので報告する。症例は77歳の女性。主訴は肛門からの出血。平成14年7月5日より、出血を認め、近医を受診。大腸内視鏡で歯状線の口側に4cm大の黒色調の腫瘍を認め、生検で悪性黒色腫と診断された。同8月30日当科入院し、同9月6日、腹会陰式直腸切断術及びリンパ節郭清を施行した。術後病理組織検査の結果、腫瘍は、malignant melanoma、深達度はsm3, ly1, v1, リンパ節転移は認めなかった。術後3ヶ月現在再発なく、経過

観察中である。直腸悪性黒色腫は、稀な疾患であり、また、早期に血行性、リンパ行性に転移を来たすため、予後不良な疾患である。治療は、化学療法奏功率が低いため、遠隔転移がなければ外科的にリンパ節郭清を含めた手術を行う。

27 S状結腸癌の口側穿通から生じた腸間膜膿瘍の1例

富田 広・遠藤 和彦・木村 愛彦
蛭川 浩史・後藤 伸之・大矢 洋
黒崎 亮・今井 一博

秋田組合総合病院外科

われわれはS状結腸癌によりその口側腸間膜に穿通を来たした症例を経験したので報告する。症例は70歳の男性。急激に発症した下腹部痛を主訴に受診。腹部単純X線にて右上腹部に結腸の走行とは異なる巨大異常ガス像を認めるもfree airは認めず。腹部CTにて結腸腸間膜内にガス像と糞便を認め、結腸腸間膜穿通の診断にて緊急手術を施行した。開腹所見にてS状結腸に全周性の腫瘍を認め、その口側の腸間膜に穿通による巨大膿瘍を形成していた。ハルトマン手術を施行した。大腸穿孔で腸間膜側の穿通は極めて稀であり、さらに大腸癌に伴う腸間膜側への穿通はほとんど報告例がみられない。

28 当科の結腸癌手術症例の検討

山崎 俊幸・山本 睦生・桑原 史郎
大谷 哲也・片柳 憲雄・斎藤 英樹
藍沢 修

新潟市民病院外科

1991年から11年間の結腸癌手術712例を対象に、手術成績を検討した。経過観察674例(追跡率95%)、観察期間は平均5年4ヶ月であった。

5生率は全例で63%、10生率は51%であった。根治度別ではcurA 79%、curB 46%、curC 0%。病期別では0期94%、I期96%、II期78%、III a期77%、III b期51%、IV期6%。郭清度別では、II期とIII a期でD1以下に対しD2以上が有